✚ 輸血情報

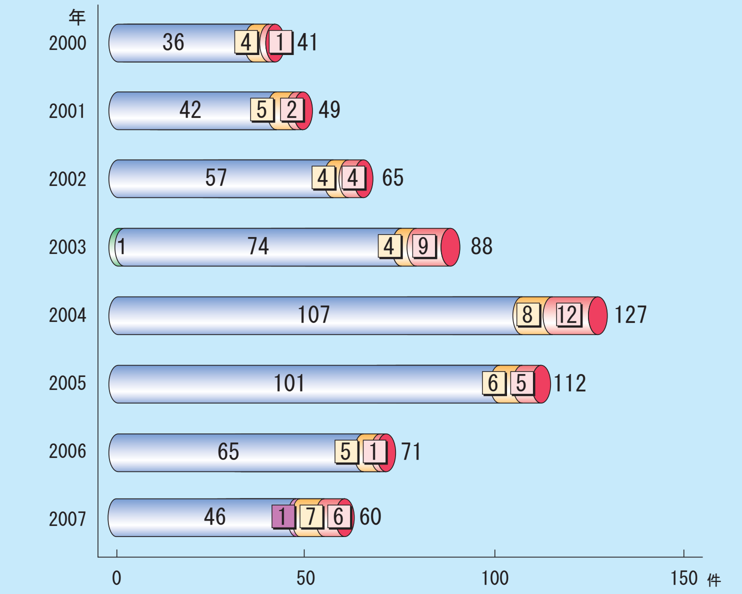
輸血用血液製剤との関連性が高いと考えられた感染症症例 -2007年-

輸血によるウイルス等の感染が疑われ、2007年に医療機関から赤十字血液センターに報告された症例（自発報告）及び献血後情報に基づく遡及調査を行った症例の中で、献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出され、輸血による感染が特定されたものは、HBV　13例、HCV　1例でした。

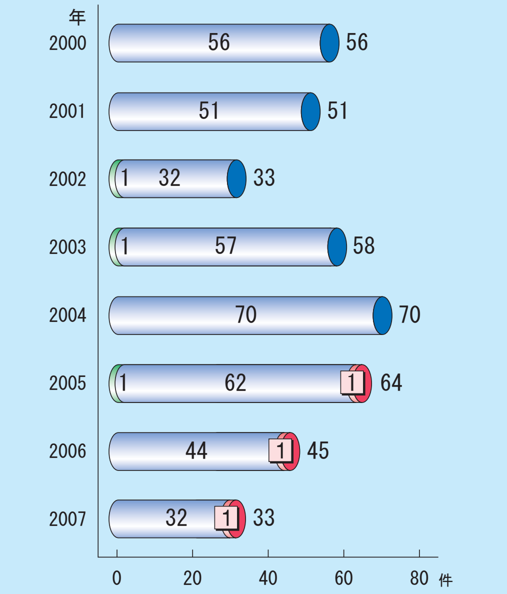
輸血による感染の疑いとして赤十字血液センターに報告された症例及び献血後情報への対応症例の件数※と解析結果【HBV・HCV】　－２０００～２００７

※医療機関と日赤の評価で、輸血との因果関係が否定されたHBVの14症例、HCVの8症例は除く。（裏面「輸血前の患者検体の保管と感染症検査の重要性」を参照）

- （青）献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出されなかった症例（自発報告症例）
- （紫）献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出されたが、輸血による感染の可能性が低いとされた症例＊（自発報告症例）
  ＊患者と献血者から検出されたウイルスの遺伝子型の不一致
- （橙）献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出され、輸血による感染が特定された症例（自発報告症例）
- （赤）献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出され、輸血による感染が特定された症例（献血後情報に基づく報告症例）
- （緑）解析できなかった症例（自発報告症例）



HBV感染（輸血後HBV関連マーカーが陽性）として医療機関から報告された症例の解析件数と結果



HCV感染（輸血後HCV関連マーカーが陽性）として医療機関から報告された症例の解析件数と結果

症例概要（献血血液の保管検体等にウイルス核酸が検出され、輸血による感染が特定された症例）－２００７年

【HBV】

● 自発報告：輸血によるウイルス感染の疑いとして医療機関から報告された症例

症例No.	原疾患	輸血用血液製剤※（採血年月）	年齢	性別	輸血前			輸血後※※			ALT		患者検体
					検査項目	検査結果	輸血までの期間	検査項目	検査結果	輸血からの期間	最高値（IU/L）	輸血からの期間	輸血前
1	出血性胃潰瘍	Ir- RC-M･A･P（2006. 9）	50代	女	HBs抗原・HBs抗体 HBc抗体	陰性	0日	HBV DNA	陽性	18週	1505	18週	有
2	変形性股関節症	RC-M･A･P（2006. 9）	70代	女	HBｓ抗原	陰性	7日	HBｓ抗原	陽性	23週	1544	24週	なし
3	虚血性心疾患 慢性腎不全　他	FFP（2006. 2）	60代	男	HBｓ抗原	陰性	14日	HBｓ抗原	陽性	17週	1341	19週	有
4	膀胱癌	Ir-RCC-LR（2007. 1）	70代	男	HBs抗原・HBs抗体 HBc抗体	陰性	1日	HBｓ抗原	陽性	16週	◆	◆	有
5	骨髄異形成症候群	PC（2007. 2）	10代	男	HBs抗原・HBs抗体	陰性	43日	HBｓ抗原	陽性	24週	96	28週	有
6	経腟分娩後弛緩出血	Ir-RCC-LR（2007. 6）	30代	女	HBV DNA・HBc抗体	陰性	0日	HBV DNA	陽性	16週	2884	26週	有
7	前立腺癌	Ir-RCC-LR（2007. 8）	60代	男	HBs抗原・HBs抗体 HBc抗体	陰性	0日	HBｓ抗原	陽性	9週	◆	◆	有

※保管検体等にウイルス核酸が検出された献血血液の種類　※※医療機関での検査結果（陽性確認日）　◆ALTの上昇がない、または比較データがない症例

献血後情報 ： 献血血液のスクリーニング検査の陽転化情報に基づく遡及調査により医療機関から報告された症例

症例No.	原疾患	輸血用血液製剤※（採血年月）	年齢	性別	輸血前			輸血後※※			ALT		患者検体
					検査項目	検査結果	輸血までの期間	検査項目	検査結果	輸血からの期間	最高値（IU）	輸血からの期間	輸血前
8	再生不良性貧血	Ir-PC（2006.11）	60代	男	HBｓ抗原	陰性	252日	HBｓ抗原	陽性	9週	◆	◆	有
9	骨髄異形成症候群	Ir-PC（2006.9）	70代	男	HBs抗原・HBs抗体 HBc抗体	陰性	79日	HBV DNA	陽性	15週	◆	◆	有
10	慢性腎不全	Ir- RC-M･A･P（2006.9）	80代	男	HBｓ抗原	陰性	19日	HBV DNA	陽性	29週	105	33週	なし
11	心不全、大動脈弁狭窄症 上行大動脈瘤	Ir- RC-M･A･P（2006.6）	70代	女	HBs抗原・HBs抗体	陰性	15日	HBs抗体 IgM-HBc抗体	陽性	35週	◆	◆	有
12	急性腎不全 播種性血管内凝固症候群	Ir-PC（2007.1）	70代	男	HBｓ抗原	陰性	1日	HBs抗原	陽性	11週	73	17週	なし
13	胃前癌	RCC-LR（2007.6）	80代	男	HBｓ抗原	陰性	111日	HBs抗原	陽性	16週	◆	◆	なし

※保管検体等にウイルス核酸が検出された献血血液の種類　※※医療機関での検査結果（陽性確認日）　◆ALTの上昇がない、または比較データがない症例

【HCV】

自発報告 ： 輸血によるウイルス感染の疑いとして医療機関から報告された症例

症例No.	原疾患	輸血用血液製剤※（採血年月）	年齢	性別	輸血前			輸血後※※			ALT		患者検体
					検査項目	検査結果	輸血までの期間	検査項目	検査結果	輸血からの期間	最高値（IU）	輸血からの期間	輸血前
1	再生不良性貧血	Ir-RCC-LR（2007.8）	50代	女	HCＶ RNA HCVコア抗原 HCV抗体	陰性	64日	HCＶコア抗原	陽性	6週	◆	◆	有

※保管検体等にウイルス核酸が検出された献血血液の種類　※※医療機関での検査結果（陽性確認日）　◆ALTの上昇がない、または比較データがない症例

輸血前の患者検体の保管と感染症検査の重要性

2007年に医療機関より報告された輸血後感染疑い症例のうち、医療機関と日赤の評価において、輸血との因果関係が否定された症例は、HBVが14例、HCVが8例でした。

内訳

- 輸血前の患者検体の調査によりウイルス遺伝子が検出された症例は、HBVが9例、HCVが4例。
- 輸血後の患者検体の調査によりウイルス遺伝子及び血清学的検査が陰性の症例は、HBVが4例、HCVが4例。
- 残りのHBV感染疑いの1症例は、後に院内で感染したとの報告がありました。

↳輸血による感染の有無を確認する手段として、輸血前の患者検体を保存し、輸血後の感染　症検査が陽性の場合には、輸血前後の患者検体の確認検査を行うことが重要であると考え　られます。

核酸増幅検査（NAT）の実施状況【1999年7月～2008年4月】

献血血液（HBs抗原検査陰性、HBc抗体検査陰性、HCV抗体検査陰性、HIV-1及びHIV-2抗体検査陰性、ALT正常のもの）に対するNAT陽性数は次の通りです。

検体プールサイズ	検査対象数	NAT陽性数（頻度）		
		HBV	HCV	HIV
500（1999年7月～2000年1月）	2,140,207	19（約1/11万）	8（約1/27万）	0（　－　）
50（2000年2月～2004年8月）	24,702,784	473（約1/　5万）	72（約1/34万）	8（約1/309万）
20（2004年8月～2008年4月）	18,130,141	321（約1/　6万）	32（約1/57万）	11（約1/165万）

輸血用血液製剤または血漿分画製剤の使用による副作用・感染症が疑われた場合は、直ちに赤十字血液センター医薬情報担当者までご連絡ください。また、原因究明のために、使用された製剤及び患者さんの検体（使用前後）等の提供をお願いします。
なお、使用された製剤及び患者さんの検体は「血液製剤等

《発行元》
日本赤十字社　血液事業本部　医薬情報課
〒１０５−８５２１　東京都港区芝大門一丁目１番３号
URL　http://www.jrc.or.jp/mr/top.html